

---

# 「テキストとしての都市」サラマンカの詩的多様性

小阪 知弘

## 要 旨

1218年にサラマンカ大学が創設されて以来、サラマンカは大学都市として知的発展を遂げてきた。同時に、様々な作家たちによって文学的題材としてサラマンカは詩的に描写されてきたのである。したがって、本稿では、ミゲル・デ・セルバンテス、ホセ・デ・エスプロンセーダそしてカミロ・ホセ・セラなどの作家たちが創造した文学作品を通して「テキストとしての都市」サラマンカの詩的多様性を分析する。本稿における分析を整合すれば、「テキストとしての都市」サラマンカの詩的多様性を以下のように定義することができる。第一に、サラマンカは中世から21世紀現在に至るまで常に大学都市であり、「学問の府」として学術的に機能してきた都市である。第二に、「知の発信地」である大学都市サラマンカは中世スペインから黄金世紀スペインにかけて「魔術の都市」としての別の顔も備えていたのである。第三に、サラマンカは、月夜に輝くマヨール広場、新・旧大聖堂<sup>カテドラル</sup>そしてサラマンカ大学の正面玄関に代表される美しい歴史的建造物で構築された独自の詩的世界を備える情緒豊かな町でもある。総括すれば、「テキストとしての都市」サラマンカは数々の文学作品に彩られた独自の詩的世界と卓越した学術的歴史を内包する魅惑的な大学都市だと言うことができる。

Salamanca se desarrolló académicamente como ciudad universitaria a partir de la fundación de la Universidad de Salamanca en 1218. Al mismo tiempo, dicha ciudad ha sido descrita poéticamente por diversos escritores. En este artículo analizaremos la Salamanca de los textos literarios a través de las obras de Miguel de Cervantes, José de Espronceda y Camilo José Cela, entre otros. Por medio de este análisis descriptivo, podemos definir la diversidad poética de Salamanca como

texto literario del modo siguiente: en primer lugar, Salamanca ha sido y sigue siendo una ciudad universitaria como centro intelectual desde la época medieval hasta hoy día. Por otro lado, Salamanca tuvo otra cara misteriosa como ciudad mágica desde la época medieval hasta el Siglo de Oro. Asimismo, Salamanca es una ciudad poéticamente bella con sus edificios históricos, como la Plaza Mayor iluminada por la luz de la luna, la Catedral Nueva y Vieja y la fachada de la Universidad de Salamanca. De este análisis, llegamos a la conclusión de que Salamanca es una ciudad universitaria y fascinante caracterizada por la diversidad poética que contiene su propio mundo literario y la historia académica extraordinaria.

## 1 はじめに

サラマンカはマドリードから北西 110 キロメートル地点に位置する大学都市である。トルメス川の畔に在り、ポルトガルとの国境までは 80 キロメートルの地点にサラマンカは存在している。「サラマンティカ」というローマの砦が紀元前 217 年、カルタゴのハンニバルによって占領され、やがて奪回された。この「サラマンティカ」という名称が音声変化して「サラマンカ」という現在の名称に定着していったのである。第二次ポエニ戦争（紀元前 219—紀元前 201）でカルタゴが敗れた後、サラマンカはローマの属領となった。北部スペインで産出される銀などの鉱石を南の玄関口であるセビーリャまで運搬するための交易路として発展した「銀の道」の途中に位置していたため、サラマンカは発展していったのである。

サラマンカは 6 世紀にバンダル族、のちに西ゴート族に占拠された。8 世紀にイスラム教徒たちが侵入し、1085 年にカスティーリャ＝レオン王国のアルフォンソ六世がイスラム教徒たちを追い払って、現在のサラマンカの町の基礎を築いた。1102 年、アルフォンソ六世の娘婿であるライムンド・デ・ボルゴーニャが様々な地域出身の人々をサラマンカに定住させた。12 世紀前半に、現在の旧大聖堂カテドラルの建設が開始され、サラマンカは都市として順調に

進展していったのである。

1218年にアルフォンソ九世がサラマンカ大学を創立し、以後サラマンカは大学都市として展開してきた。13世紀末に、サラマンカ大学はイタリアのボローニャ大学、フランスのパリ大学、イギリスのオックスフォード大学と共にヨーロッパ最古四大大学の一角を成すに至った。

レコンキスタを完了させ、キリスト教スペインを再び実現させたカトリック両王すなわち、イサベル一世とフェルナンド二世の両者の治世及び、遍歴王カルロス一世の統治下と慎重王あるいは書類王と呼ばれ「太陽の沈まぬ国スペイン」を現出させたフェリペ二世の治世下において、サラマンカは大学を中心点として黄金世紀を迎えた。

18世紀前半のフェリペ五世統治下において、装飾過剰を特徴とするスペインのバロック様式であるチュリゲラ様式で構成されたマヨール広場がサラマンカに建設された。今日、サラマンカのマヨール広場は国内に数多く点するマヨール広場の中で、スペインで最も美しいマヨール広場と評されている。

現在は、サラマンカ大学の付属機関であるサラマンカ大学国際コース（Cursos Internacionales de la Universidad de Salamanca）の有する外国人のための「スペイン語コース」（Cursos de español）に日本人を含む多くの外国人学生が在籍し、スペイン語の習得に励んでいる。中世の趣を備える国際都市としてサラマンカは今なお、スペインにおける「知の発信地」としての役割を担い続けている。

1988年に、マヨール広場や新・旧大聖堂<sup>カテドラル</sup>を中心として構造化されている旧市街地はユネスコ世界遺産に登録された。また、1999年にはサン・ボアール宮殿を復元改修してサラマンカ大学の一機関を成す日西文化センター（Centro Cultural Hispano-Japonés de la Universidad de Salamanca）が開設され、同センターは日本とスペインとの文化交流の窓口として機能している。そして2002年には、ベルギーのブルージュと共に、サラマンカはヨーロッパ文化

都市に指定され現在に至っている。

## 2 都市構造

トルメス川に架かるローマ橋を渡るとそこにサラマンカの町が広がっている。サラマンカの都市空間はスペイン—美しいと形容されるマヨール広場を中心点として構造化されている。同広場はチュリゲラ様式の建物で四方を囲まれている。サラマンカに住む人々と学生たちにとって〈共通の場所〉であるマヨール広場に時計塔を有する市庁舎の建物が在り、日中から夜にかけて最適の待ち合わせ場所になっている。サラマンカは時間によってその姿を変えるため、三通りのコースを堪能できると言われている。スペインの都市構造に通暁しているスペイン文学研究者、田尻陽一はサラマンカを堪能するための三通りのコースを以下のように提唱している。

- ① 午前中のコース
- ② 夕方のサラマンカをみる午後のコース
- ③ 照明で浮き上がった夜のコース<sup>1)</sup>

サラマンカには新・旧二つの大聖堂<sup>カテドラル</sup>が在る。12世紀に建造された旧大聖堂<sup>カテドラル</sup>はスペイン・ロマネスク様式を代表する大聖堂<sup>カテドラル</sup>のひとつである。16世紀初頭から18世紀にかけて建設された新大聖堂<sup>カテドラル</sup>の正面玄関に施された繊細な彫刻模様は「ゴシック様式の最後のため息」と称されるほど美しい姿を讃えている。

15世紀後半に建てられたゴシック様式の建造物、貝の家（Casa de las Conchas）は壁に四百もの貝殻を刻んだ石で飾られている。この家の持ち主であるロドリゴ・アリアス・ナバーロがサンティアゴ騎士団員であったことから、サンティアゴ巡礼のシンボルである貝殻が壁にちりばめられたと考

えられている。サラマンカにおける「知の発信点」であるサラマンカ大学の正面玄関はスペイン随一のブラテレスコ様式で成り立っており、「石の浮き彫り」が傑出している。大学の正面玄関右側上方に施されたどくろの上のっているかえるを見つけることができれば、大学を卒業できるという言い伝えがある。

もうひとつの見どころはフライ・ルイス・デ・レオン講義室（Aula de Fray Luis de León）である。神学者で詩人のフライ・ルイス・デ・レオン（1527-1591）はラテン語の聖書よりヘブライ語の聖書の方が正しいと説いて、異端審問にひっかかり、1572年2月から1576年12月まで約5年間、投獄された。釈放され、大学の教室に戻ったフライ・ルイスは「昨日申し上げましたように…」（Decíamos ayer...）と述べ、講義を再開させたという伝説的な話が残っている。また、町の北部に在るサン・マルコス修道院はスペインにおけるロマネスク様式を代表する建造物のひとつであり、サン・エステバン修道院内に配されている祭壇衝立はチュリゲラ様式を代表する建築空間のひとつである。

以上見てきたように、美しい建造物が幾多も点在する都市、サラマンカは〈遊歩者〉の視点から「歩行する身体」を通して満喫するのに最適な町である。フェルナンド・ガルシア・デ・コルタサルは *Viaje al corazón de España*（2018）『スペイン心の旅』において、サラマンカの町並みを〈遊歩者〉の視座から「歩行する身体」を介してそぞろ歩くことを次のように推奨している。

サラマンカは急がず散歩するのに適した都市である。驚きに誘われるがまま、方角も決めず幾多の通りと広場と小広場をぶらつくのに適した町なのである<sup>2)</sup>。

サラマンカを訪れる我々〈遊歩者〉は、自らの「歩行する身体」を介して、足の向くまま気の向くまま、歴史の面影が刻み込まれた数々の建造物に彩られたサラマンカの町並みをそぞろ歩くことになるのである<sup>3)</sup>。

### 3 サラマンカ大学の歴史

「あらゆる学問の教育で一番のサラマンカ」(Omnium scientiarum princeps Salmantica docet) と称されるサラマンカ大学は 13 世紀から知的発展を遂げてきた。サラマンカ大学形成の初期段階を通時的に概観すると以下 6 段階に区分できる。

- (1) 1218 年 アルフォンソ九世がサラマンカに大学校を設置した。
- (2) 1243 年 フェルナンド三世によって同年 4 月 6 日、同大学は最初の特権が与えられた<sup>4)</sup>。
- (3) 1254 年 賢王アルフォンソ十世(在位 1252-1284)によって正式に大学として認定された。
- (4) 1255 年 ローマ教皇アレクサンデル四世によって、同学校は大学としての位が与えられた。
- (5) 1292 年 ローマ教皇ボニファティウス八世によって、同大学はボローニャ大学、パリ大学、オックスフォード大学と共に世界四大大学のひとつに数えられた。
- (6) 1492 年 サラマンカ大学教授、アントニオ・デ・ネブリッハが『カスティーリャ語文法』を出版した。

結果として、イギリスのオックスフォード大学、フランスのパリ大学、イタリアのボローニャ大学と共に、スペインが誇る名門総合大学、サラマンカ大学はヨーロッパ最古四大大学の一角を形成するに至ったのである。スペイン文学研究者、清水憲男は『ドン・キホーテの世紀』(復刻版 2010)において歴代のスペイン王と大学との関係性に着目しながら、サラマンカ大学が名門総合大学として発展していった理由を以下のように推察している。

パリ、オックスフォード、ボローニャの諸大学と並ぶ名門総合大学としてサラマンカ大学が成功した理由の一つとして考えられるのは、歴代のスペイン王家による積極的な支援だ。「カトリック両王」（イサベルとフェルナンド）との密接な関係を雄弁に示すのが、同大学の有名なファサードに彫り込まれたギリシャ語の文句「両王は学院へ、学院は両王へ」だ。それ以外にも 1534 年のカルロス一世（神聖ローマ帝国皇帝カール五世）（1516-56 在位）の大学訪問を契機に助成金が増えたほか、1543 年にはフェリペ二世が同大学で結婚式を挙げるなどの象徴的出来事もあった<sup>5)</sup>。

カトリック両王、カルロス一世そしてフェリペ二世などの歴代のスペイン王による支援によって、サラマンカ大学はヨーロッパにおける名門総合大学へと成長していったのである。スペインにおける「知の発信地」としてのサラマンカ大学の知的特質は諺によって以下のように表現されている。

知を欲する者は、サラマンカで学ぶべし。（*Quien quiera saber, va a aprender en Salamanca.*）

有名なこの諺が的確に表現しているように、中世から 21 世紀現在に至るまでスペイン国内及び外国から知性を欲する学徒がサラマンカ大学に学びにやって来ているのである。

また、同大学においてラテン語文法を教授していたサラマンカ大学教授、アントニオ・デ・ネブリッハがサラマンカで上梓した『カスティーリャ語文法』（1492）はヨーロッパ初の俗語文法書である。ヨーロッパにおける俗語文法書上梓の通時的変遷を概観すれば、フォルトゥニオが著した『イタリア語文法』が 1516 年に刊行され、A・パークレイが英語で書いた『フランス語文法』が 1521 年、F・オリベイラによる『ポルトガル文法』が 1536 年、W・ブローカーの執筆した『英文法』が 1586 年に発表されている<sup>6)</sup>。すなわち、1492 年にネブリッハによって出版された『カスティーリャ語文法』は前述したこれら 4 冊の文法書の嚆矢となったのである。続けて、ネブリッハの『カ

スティーリャ語文法』と女王イサベル一世との関係性に着目してみる。

ネブリッハは女王イサベル一世にこの俗語文法書を献上した。同文法書はカスティーリャ語がスペイン帝国の言語となる起点としての役割を果たした書物である。それまで口語として存在していたカスティーリャ語をネブリッハが書記言語として文法化し言語帝国説を展開したお陰で、カスティーリャ語は中南米において流布していくこととなったのである。換言すれば、スペインがスペイン語を広めていく礎として『カスティーリャ語文法』は機能し、結果として現在においても、ブラジルを除く全ての中南米諸国とアメリカ合衆国内においてもスペイン語が話され続けている。ネブリッハはイサベル女王に捧げた『カスティーリャ語文法』の序文において、「言語は常に帝国の伴侶なりき」<sup>7)</sup>と明記し、サラマンカにおいて同文法書をイサベル一世に献上したことを以下のように述べている。

私の仕事の第三の利点は以下のようなものでございます。すなわち、私がサラマンカにて我らが陛下にこの書物の見本を献上致しました時、陛下はこの書物は何の役に立つのかとお尋ねになられました。陛下の間に対し、真に尊敬すべき神父様であられる、アビラの司教様が私に代わって返答する責務を引き受けてくださいました<sup>8)</sup>。

ネブリッハ自身による記述から、『カスティーリャ語文法』がサラマンカにおいてイサベル女王に献上されたことを窺い知ることができる。

16世紀後半、サラマンカ大学は多くの学者と思想家そして作家を輩出し、前述したフライ・ルイス・デ・レオンを中心とする「サラマンカ派」を形成しながら黄金世紀を築いた。サラマンカ大学の有する学術的思想と教育システムは海を越えて、母語を同じくするラテンアメリカ諸国における大学の創設に大きく貢献した。具体的に、サラマンカ大学を学術的及び教育学的モデルとして、ペルーの首都リマにサン・マルコス国立大学が1551年5月12日に創設され、続けてメキシコにメキシコ国立自治大学が同年9月21日に



創設されたのである。別言すれば、国境を越えてサラマンカ大学の学術的思想と教育システムがラテンアメリカ諸国の大学創設の基盤に導入されたのである。自らもサラマンカで学んだスペイン哲学研究者、木下登は『吹き抜ける風』（1995）において、サラマンカ大学の学術的様相と海を越えた広がりを持つ国際性を以下のように指摘している。

この大学の教育制度は（サラマンカ大学のこと－引用者註）、ペルーのサン・マルコス大学（1551年創立）をはじめ、新大陸に設立された多くの大学においてそのひな型とされた。

首都マドリードの北西二百キロにある人口17万ほどの典型的な学園都市に、今も毎年、内外から三万余りの学生が集い、哲学、文学、法学、薬学、医学などを学ぶ。（中略）

サラマンカは、学問を通じての新大陸との関わりという観点から、異彩を放つ<sup>9)</sup>。

そして現在、サラマンカ大学はスペイン政府によって、特に優れた学術事業を展開している大学に付与される認定制度である、「国際優秀キャンパス」（Campus de Excelencia Internacional）に認定されている。すなわち、「スペイン語の振興と普及」を掲げるサラマンカ大学は現在もスペイン国内及びラテンアメリカ諸国といったスペイン語を母語とする国々と諸外国における「知の発信点」として一翼を担い続けている<sup>10)</sup>。

#### 4 テキストとしての都市 サラマンカ

「知の発信地」として発展してきたサラマンカは、文学作品においてもその町並みや風景が取り上げられてきた。『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』（1554）の冒頭場面はサラマンカにおいて展開する。『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』は合計7章から成る「16世紀スペインの縮図」とでも言うべき比較的短い、一人称で語られる写実的な物語である。作品は下層階級に

属する少年が自らを中傷しあざ笑う自己言及的な構造を備えている。サラマンカのトルメス川の近くで泥棒の父親と怪しい母親との間に生まれた少年ラサロは、吝嗇な盲人、食事を与えてくれない聖職者、体面を気にする惨めな郷土などに仕えながら、めげることなく生き続け、最終的に触れ役という卑しい官職を得て、主席司祭の下女と結婚するというのが物語の概要である。この作品の主人公であるラサロは、自らがサラマンカの都市空間の傍に流れるトルメス川で生を受けたことを、以下のように同作品の冒頭部分において述懐している。

さて、何はさておき、旦那さまに知っていただきたいことは、わたしはトルメスのラサロと呼ばれ、サラマンカの村、テハーレス生まれのトメ・ゴンサーレスとアントーナ・ペレスの一子だということでございます。わたくしの生まれたのがトルメス河のまん中だったので、そのおかげで右のようなあだ名がついた、という次第でございます<sup>11)</sup>。

引用した記述において興味深いのは、社会の周辺に身を置くラサロが町の外側に位置するトルメス川からサラマンカという町を望見している点である。今日においてもトルメス川の上に架かっているローマ橋のたもとに設置されている牛の石像は『ラサリーリョ・デ・トルメス』第一話における盲とラサロの逸話において、以下のように描写されている。

わたくしたちがサラマンカを出て、ちょうど橋のところへさしかかりますと、その橋の渡口のところに、どうやら牡牛の形をした石の動物像がありました。すると盲はわたくしにその動物の像のそばへ行けと命令し、わたくしがそこに行く、と、こう申しました。  
「おい、ラーサロ、この牛に耳をあててみな、中でどれくらい音が聞こえるから」  
そこで、わたしは、ごく無邪気に、そうかなと思って耳を近づけました<sup>12)</sup>。

この場面を一読して驚かされるのは、1554年に発表された作品に登場して

いる橋と牛の石像が、何世紀も経過した 21 世紀現在においても、いまだその原型を失うことなく存在していることである。

カミロ・ホセ・セラは『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』を基にした小説、『ラサリーリョ・デ・トルメスの新しい遍歴』（1944）を創作している。セラの創作した現代版『ラサリーリョ・デ・トルメス』においても原典と同様、サラマンカの町を起点にして物語が進展していく。同小説において、セラは以下のようにサラマンカに言及している。

わたしは、祖父のように川のまん中で生まれたのでもないし、祖父たちのようにテハレスの出でもない、しかしトルメス川の地の出であることは間違いない。というのは、はじめておてんとうさまを見たところは、同じサラマンカ県のレデスマで、きちんと数えていないが、まだ数年前のはずだから、これが一番確かなところではないか<sup>13)</sup>。

原典と同様、セラが現代に復活させたラサリーリョの物語においても、トルメス川が物語の起点となる重要な磁場として作用している。メキシコ生まれで後にスペインに渡り、サラマンカ大学で学んだ劇作家、フアン・ルイス・デ・アラルコン（1581?-1639）はミゲル・デ・セルバンテスの同名の幕間劇の影響のもと執筆した劇作品、『サラマンカの洞窟』（1628）において、登場人物であるルシアとサムディオとの間で交わされる発話を通して、以下のようにトルメス川に言及している。

ルシア 気がついたら、  
トルメス川に到着していたわ。  
サムディオ 余儀なくされたことではあったが、  
良き同伴者を得て、  
長き道のりもあつという間だったわけだ<sup>14)</sup>。

セルバンテスも「知の発信地」としての大学都市サラマンカに注目した作

家である。セルバンテスは12作品から成る『模範小説集』(1613)の一角を成す短編、「びいどろの学士」の起筆を次のようにサラマンカのトルメス川の描写と共に開始している。

ある時、トルメス川のほとりを散歩していたふたりの学生は、とある木陰に、11歳そこそこの農民のような身なりをした少年の眠っているのを目に止めた。そこで貴族の子息であるふたりは、連れていた従者に、その少年を起こすよう命じ、目を覚ました少年に向かって、どこから来たのか、そして、こんな人気がないところで眠っていたが、何をするつもりなのか、と尋ねた。すると少年は、生まれた土地の名前なんてとうに忘れてしまいました。これからサラマンカの町へ行って、勉強しながら奉公させてくれる主人を探すつもりです、と答えた<sup>15)</sup>。

この記述で特筆に値するのは、セルバンテスがサラマンカを学問に勤しむための都市、すなわち「大学都市」として捉えている点である。続けて、セルバンテスはサラマンカ大学に言及しながら、同短編を書き進めている。二人の貴族の質問に少年が答える発話場面に焦点をあててみる。

「学問によってです。それで名を上げるつもりです。学さえ積みば、誰でも司教様になれるって聞いたことがありますから」と少年は答えた。

この答えにたいへん感心したふたりの貴族は、少年を召し抱えようと思った。そして、実際に町に連れて行き、当時サラマンカ大学でおこなわれていた慣習にならって、従者となった彼に学ぶ機会を与えることにした<sup>16)</sup>。

物語が進展していくなか、主人公トマスはアンダルシアに一時滞在することになるのだが、再び、サラマンカに戻ることを切望し、その胸を主人に告げることになる。その場面をセルバンテスは以下のように記している。

ところが、彼は学問を続けるために、もう一度サラマンカへそこはそのたまたまののどかさを一度でも味わったものならみな戻りたくなる魅惑的な町一

に戻りたい、という思いをどうしても断ち切ることができなかった<sup>17)</sup>。

ここに引用したセルバンテスによる記述で瞳目に値するのは、セルバンテスがサラマンカのことを「そのたたずまいののどかさを一度でも味わったものならみな戻りたくなる魅惑的な町」と定義している点である。セルバンテスが記述しているように、サラマンカは中世から変わることなく「みな戻りたくなる魅惑的な町」として存在し続けているのである。セルバンテスによるこの言説から 17 世紀初頭において、サラマンカ大学では召使にも学問をする機会が与えられていたことが窺える。さらに同短編の物語内容は展開していき、青年となった主人公トマスは学業を成就させるためにサラマンカ大学に復学することになる。セルバンテスは同場面を以下のように綴っている。

こうして外国に出て見聞を広めたいという彼の願望は果たされたのである。それゆえ、スペインに帰国してサラマンカで学業に専念しようと決心し、早速実行に移すことにした。(中略)

ついにサラマンカに帰り着いたトマスは、そこで友人たちから大歓迎を受けた。そして、彼らの好意のおかげで学問を続けた結果、法学士の称号を得ることができたのである<sup>18)</sup>。

このように、自ら創作する作品世界内においてセルバンテスは主人公トマスにサラマンカ大学の法学士の学位を獲得させている。そして、同短編後半部分において、びいどろ学士であるトマスは誇りをもって以下のように自らの学識の高さを披歴している。

ぼくはサラマンカ大学の法学部を卒業しました。苦学の末、二番の成績で学位を得ました。そのことから、ぼくの持っている学位が決して依怙<sup>えこひ</sup>最<sup>き</sup>眞<sup>ま</sup>によるものではなく、実力によって獲得したものだということがおわかりいただけるでしょう<sup>19)</sup>。

引用したトマスによる発話内容に関して敷衍しておかなければならないのは、17世紀初頭当時において、サラマンカ大学で一番の成績を修める者は、依怙最員を受けた者であり、数量的観点から見た本当の一番は成績上における二番であったという点である。この発話内容から、びいどろ学士トマスの知性の高さが窺える。また、セルバンテス作と見做されている「にせの叔母さん—1575年にサラマンカで起きた真実の物語」の書き出しの記述においても以下のようにサラマンカに言及されている。

バルトゥーロやバルトなどの著作より、剣や盾を振りまわすほうが好きな、ラ・マンチャ出身の二人の若い学生がサラマンカのとある通りを歩いていたとき、人肉をひさぐ一軒の店の窓に格子の目隠しがかかっているのが目に入ったが、それは二人には奇妙なことに思われた<sup>20)</sup>。

さらにセルバンテスは同短編において、女性登場人物のドニャ・クラウディアの発話を媒介として学術的観点に立脚しながら、大学都市サラマンカを以下のように定義している。

いいかい、よく聞くんだよ。いまお前はサラマンカにいるんだが、ここは世界中の人たちから学問の府とも、知識の宝庫とも、優れた独創性の保管所とも呼ばれている町で、常時一万から一万二千人もの学生さんたちが住みついて学問を修めているところなんだが、彼らはみんな若くて、気まぐれで、無鉄砲で、自由で、放埒で、凝り性で、浪費家で、滑目で、ずる賢くて、冗談好きな人たちなんだよ<sup>21)</sup>。

ドニャ・クラウディアの発話を通して、セルバンテスはサラマンカを「学問の府」、「知識の宝庫」、「優れた独創性の保管所」と三通りに定義している。そして、17世紀初頭において、サラマンカには常時一万から一万二千人もの学生が住みながら学業に専念していたことをセルバンテスは証言しているのである。

同様に、セルバンテスは『ドン・キホーテ』（前編 1605／後編 1615）において、知性と学問を表象する大学都市としてのサラマンカの学術の様相を強調している。同書にはサンソン・カラスコという名前のサラマンカ大学を卒業した知識人が登場するが、セルバンテスは同書後編において、ドン・キホーテの従者であるサンチョ・パンサの発話を媒介として、サラマンカ大学を終了した学士が有する知的な誠実さを以下のように叙述している。

なにしろカラスコさんは、いやしくもサラマンカ大学で学士になりなされたお人だ。そういう人だったら、ふいに気まぐれを起こしたときとか、それとも自分にとって都合のいいときででもない限り、決して嘘なんかつくはずねえからね<sup>22)</sup>。

このように、セルバンテスは自ら創造する作品世界の知的水準を高めるため、びいどろ学士トマスとサンソン・カラスコというサラマンカ大学を終了し学士となった人物を登場させているのである。また、セルバンテスは『新作コメディア八篇と幕間劇八篇』（1615）に収められている幕間劇、「サラマンカの洞窟」の登場人物である学生もサラマンカ大学を卒業しているという設定のもと、以下のようにこの学生に発話させている。

学生 わたしにお答えできるのは、奥さま方、わたしはおかげさまでサラマンカ大学を卒業して…<sup>23)</sup>。

サラマンカ大学が「知の発信点」であったのは中世の時代だけではない。20 世紀においてもそうであったし、21 世紀現在においても、サラマンカ大学は「知の発信点」として優れた学徒を輩出し続けている。カミロ・ホセ・セラは『アンダルシア紀行』（1957）において、「磨かれた教養と詩的な知性の持ち主で、サラマンカ大学で比較芸術論を教える風来坊の友人—その名はドン・ラファエル」<sup>24)</sup> というサラマンカ大学で比較芸術論を教授している人物を作品世界内に登場させている。カミロ・ホセ・セラが「サラマンカ大学

で比較芸術論を教える風来坊の友人」が「磨かれた教養と詩的な知性の持ち主」であると強調していることから、20世紀においてもセルバンテスの生きた17世紀と同様、サラマンカ大学出身者は知性を象徴する人物として捉えられていることがわかる。続けてセラは同紀行文において、「知を欲する者はサラマンカで学ぶべし」という有名な諺を以下のように引用している。

世間では何か知りたいことのある人はサラマンカへ行けという<sup>25)</sup>。

引用したセラによるサラマンカをめぐる記述に留意すれば、20世紀においても、中世やセルバンテスの生きた黄金世紀と同様、サラマンカが大学都市であり、サラマンカ大学が知性を象徴する知的空間であることを自ずと理解できる。

また、ダン・ブラウンの小説、『オリジン』(2017)においても、主要登場人物の一人でビルバオのグッゲンハイム美術館長であるヒロイン、アンブラ・ビダルはサラマンカ大学出身者と設定されている。同小説の登場人物の一人であるスペイン王子は以下のようにアンブラ・ビダルの学歴に言及している。

「アンブラ・ビダル」王子は淡々と言った。「39歳。サラマンカ大学で美術史学の学位を取得。ビルバオのグッゲンハイム美術館の館長。」<sup>26)</sup>

ここまで展開させてきたテキスト分析から明らかなように、サラマンカ大学は中世及び黄金世紀と同様、21世紀現在においても優れた学徒を輩出し続け、「知の発信点」として輝き続けている。

## 5 魔術の都市 サラマンカ

中世スペインから黄金世紀スペインにかけて、大学都市サラマンカは「知の発信地」という顔以外に「魔術の都市」という別の顔を兼ね備えていた。



清水憲男は中世スペインにおける魔術の二大拠点を次のように指摘している。

スペインにおける魔術の拠点としては二つの町が著名だ。トレドとサラマンカである<sup>27)</sup>。

アロンソ・デ・エルシーリャ（1533-1594）は『アラウカ族』（1589）において、大学都市であると同時に「魔術の都市」でもあるサラマンカの二面性を以下のように記述している。

サラマンカは全ての  
学問に秀でており  
魔術も常に教えられていた<sup>28)</sup>。

このように、エルシーリャは大学都市サラマンカで魔術も教えられていたことを明記している。

セルバンテスは先述した「サラマンカの洞窟」において、サラマンカの洞窟において魔術が教えられていたことを登場人物の学生とパンクラシオとの発話場面を媒介として、以下のように詳述している。

学生 生まれ故郷のサラマンカの洞窟で覚えた魔術を異端審問所<sup>はばか</sup>を憚ることなく使えたら、子種が絶えることはあっても、夕食も夜食もたらふく食べられるのですがね。何しろこの場では、必要に迫られ弁解もたちますから使ってもいいのかもしれませんが、このご婦人方がわたしのように口が固いかわかりませんので。

パンクラシオ それなら心配無用だ。思う存物やってくれ。女たちには黙っているようわたしからよく言っておくから。そのサラマンカの洞窟で教える魔術とやら、是非とも拝見したいものだ<sup>29)</sup>。

「サラマンカの洞窟で教える魔術」というパンクラシオによる発話から、中世スペイン及び黄金世紀スペインにおいて大学都市サラマンカは「魔術の都

市」でもあったことが窺える。芝居が展開していくなか、聖器具係と床屋の二者間における発話場面において、再び「サラマンカの洞窟」に焦点があてられている。

聖器具係 （中略）あまりご存じない方に、  
嘘偽りのないこの舌で  
あそこの不思議を語りましょう、

床屋 サラマンカの洞窟の。

聖器具係 サラマンカの洞窟の  
摩訶不思議な物語  
トゥダンカ学士が牝馬の  
皮に記した物語、  
しかも雄の若駒の  
尻の近くのなめし皮、  
筆も巧みに書きとめた

床屋 サラマンカの洞窟を。

聖器具係 そこで学ぶ弟子たちは  
金があろうとなかろうと、  
みんな等しく修行に励み  
足らない知恵を身につける。  
魔術を指南する人は  
暗い岩屋に山積みされた  
タール爆弾に腰かける、

床屋 サラマンカの洞窟じゃ<sup>30)</sup>。

聖器具係と床屋は韻文形式で、魔術をめぐる「サラマンカの洞窟の摩訶不思議な物語」を歌い上げている。「サラマンカの洞窟」をめぐる二者の対話はさらに続いていく。

聖器具係 そこではパランカのモーロ人でさえ  
思慮分別を弁える。

ものぐさ坊主の学生ですら  
秘伝の魔術を盗み取る。  
そこで学ぶ者たちに  
不平不満はさらさらない。  
永遠に誉れ高き  
床屋 サラマンカの洞窟よ<sup>31)</sup>。

セルバンテスは二人の登場人物の発話を媒介として、「永遠に誉れ高き／サラマンカの洞窟よ」と同洞窟を褒め称えている。セルバンテスはパンクラシオによる最後の発話場面を通して、再度「サラマンカの洞窟」に言及している。

パンクラシオ では行きましょう。悪魔が食べるかどうか、その他いろんな噂が本当なのかどうか、調べたいので。サラマンカの洞窟で教える知恵と魔術とをわたしに教えてくれるまで、この家から出ていかせませんよ<sup>32)</sup>。

セルバンテスがパンクラシオの発話を介して述べている「サラマンカの洞窟で教える知恵と魔術」という言説からも、中世及び黄金世紀におけるスペインにおいて、サラマンカが大学都市であると同時に「魔術の都市」としても顕現していたことが明らかとなる。では、続けてサラマンカをめぐる詩的描写に焦点をあてることにする。

## 6 サラマンカをめぐる詩的描写

大学都市にして「魔術の都市」でもあるサラマンカは詩人たちが注目し描写した独自の詩的世界を有する中世の町でもある。ホセ・デ・エスプロンセーダ(1808-1842)はサラマンカが舞台となっている長編詩、『サラマンカの学生』を創作している。エスプロンセーダは次のようにトルメス川とサラマンカの

町並みを詩的に描写している。

どこもかしこも眠りの世界、  
水流豊かなトルメス川でうるおい  
詩人たちによって詠<sup>うた</sup>われた  
名高いサラマンカの街並みも  
眠りこけた聖者の墓場と  
化してしまったのだ<sup>33)</sup>。

エスプロンセダは「水流豊かなトルメス川でうるおい」と形容しながら、この川のことを高く評価している。そして、エスプロンセダは「名高いサラマンカの街並み」と記して、サラマンカの都市空間が備える美しさを称えているのである。第二のドン・フアンである主人公、ドン・フェリックス・モンテマールは白装束を着た美しい女性を求めて、サラマンカの路地をさ迷い歩き、最終的にその白装束の女性を手中に収めることに成功するが、実はその白装束の女性が白骨姿の悪魔であることが露見する。そして物語はサラマンカの夜の情景を背景としながら、ドン・フェリックスが白骨姿の悪魔と共にあの世へと向かっていく時点で終結するのである。エスプロンセダはサラマンカに言及しながら、物語の最終局面を以下のように叙述している。

罪深く非情で改悛の情を持たぬ  
人びとが涙を流しながら言うには、  
あの晩、怪しい白装束をまとい  
女人<sup>おんな</sup>になりすました悪魔が  
モンテマールの魂を奪いに  
サラマンカにやって来たのだと！<sup>34)</sup>

また、ロルカと共に二七年世代を形成する詩人、ヘラルド・ディエゴ（1896-1987）は詩集、『ロマン主義のスペイン』（1980-1982）に収録されてい

る詩篇、<sup>カテドラル</sup>「旧大聖堂—サラマンカ」において、次のように<sup>カテドラル</sup>サラマンカ大聖堂に内包された奇跡に焦点をあてている。

—息子よ、さあ、こっちへおいで。  
—父さん、イヤだよ。あそこの高い所に、鳥の巣があるよ。  
—あれは鳥の巣なんかじゃないよ、おいで。  
—ニワトリが鳴いているのが聞こえないの？  
—ニワトリはもう鳴いてないよ。さあ、手をつなごう。  
—離してよ、父さん。僕、あのバルコニーまで上りたいんだ。  
—どうして？  
—よく見えるように、そしてよく聞こえるようにさ。  
—おまえ、あれはアマツバメだよ。  
—それに、尖塔と煙突のかさだ。  
—うん。そうかもしれない。そんなこと、誰が知ってるんだい？  
—その三角形と十字架さ。

もしも君たちが今でも  
その奇跡を見たとしたら  
父と息子はわたしひとりであることを知っていてほしい、  
わたしがその二人なのだと  
それには理由がある、  
なぜならわたしたちはあそこで生まれたのだから、  
そしていまだにわたしは沈思し、ふたりに分離されている<sup>35)</sup>。

ヘラルド・ディエゴは詩的対話を駆使して、<sup>カテドラル</sup>サラマンカ大聖堂を描写している。前述したように、<sup>カテドラル</sup>サラマンカ大聖堂は<sup>カテドラル</sup>旧大聖堂と<sup>カテドラル</sup>新大聖堂の二つから成り立っている。引用した発話場面における父は<sup>カテドラル</sup>旧大聖堂で、息子<sup>カテドラル</sup>が<sup>カテドラル</sup>新大聖堂なのである。このように、ヘラルド・ディエゴは<sup>カテドラル</sup>旧大聖堂と<sup>カテドラル</sup>新大聖堂による静謐な対話を巧みに組み立てながら、<sup>カテドラル</sup>サラマンカにおける奇跡の風景を詩的に現前化させている。

同様に、ギリシア哲学の教授で1900年から1914年及び、1931年から

1936 年までサラマンカ大学総長であり、『生の悲劇的感情』(1912)や小説、『霧』(1914)などの著作で知られる文学者、ミゲル・デ・ウナムノ(1864 - 1936)は詩集、『カスティーリャ』の一角を成す 31 連から成る長編詩、「サラマンカ」において、以下のようにサラマンカ大学の教室風景を詩情豊かに紡ぎ出している。

サラマンカよ、あなたの切り石の傍らに、  
一年、一年、あなたの教室で実った  
静謐なる詩作の結実した  
思い出が眠っている<sup>36)</sup>。

続けて、ウナムノは「学びの場」、すなわち「知の発信地」としてのサラマンカの学術的様相に注目しながら、以下のように綴っている。

おお、サラマンカよ、取り巻く野原が  
豊潤な果実を実らせている間にも、  
学生たちはあなたの金の石のなかで、  
愛することを学んでいたのだ。  
わたしは深い心でもってあなたの逞しい  
魂を保つ、わたしの黄金に輝くサラマンカよ、  
願わくばわたしが死に瀕したとき、  
あなたがわたしの思い出を保ちますように<sup>37)</sup>。

引用した詩節において、ウナムノは同大学都市のことを「黄金に輝くサラマンカ」と形容している。そして、1934 年にサラマンカ大学終身総長に任命されることになるウナムノはこの詩作を通して、サラマンカと自らの一体性を莊厳に表現しているのである。

## 7 結論

ここまで展開させてきた分析を整合すれば、「テキストとしての都市」サラマンカの詩的多様性を以下のように定義することができる。第一に、「テキストとしての都市」サラマンカは中世から 21 世紀現在に至るまで常に大学都市であり、「学問の府」、「知識の宝庫」、「優れた独創性の保管所」として学術的に機能してきた都市である。第二に、「知の発信地」である大学都市サラマンカは中世スペインから黄金世紀スペインにかけて「魔術の都市」としての別の顔も備えていたのである。第三に、「そのたたずまいののどかさを一度でも味わったものならみな戻りたくなる魅惑的な町」であるサラマンカは、水流豊かなトルメス川、親子のように立ち並ぶ旧大聖堂カテドラルと新大聖堂カテドラル、黄金に輝くサラマンカ大学大講堂そして、月夜に輝くマヨール広場に代表される美しい夜景に彩られた独自の詩的世界を備える情緒豊かな町でもある。

総括すれば、中世スペインから黄金世紀スペインにかけて「魔術の都市」であったサラマンカは、水流豊かなトルメス川と中世の町並みが彩る美しい夜景、そして黄金に輝くサラマンカ大学大講堂に表象される独自の詩的世界と学術の歴史を内包する情緒豊かな大学都市だと言うことができる。

## 註

- 1) 田尻陽一『原色の旅 熱い新鮮 スペイン』昭文社, 1998, 115 頁。
- 2) 引用者訳。Fernando García de Cortázar, *Viaje al corazón de España*, Madrid, Arzalia Ediciones, (3ª. ed), 2018, p. 441.
- 3) サラマンカの町の概要に関しては以下の文献を参照のこと。Alfonso Rodríguez G. de Ceballos, *Guía artística de Salamanca*, León, Ediciones Lancia, 2014, pp. 122-132.
- 4) Vicente Beltrán de Heredia, *Los orígenes de la Universidad de Salamanca*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, (3ª. ed), 1999, p. 37; Teodoro Peña Fernández, *Guía*

- de la Universidad de Salamanca*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, (3ª. ed), 1999, p. 40.
- 5) 清水憲男『ドン・キホーテの世紀（復刻版）』岩波書店, 2010, 34-35 頁。
  - 6) 清水憲男「ネブリハ論序説—スペイン・ルネサンスの視座—」『思想』岩波書店, 1982 年 12 月, 82 頁。
  - 7) 引用者訳。Antonio de Nebrija, *Gramática de la lengua castellana*, Edición de Antonio Quilis, Madrid, Editora Nacional, 1981, p. 97. 『カスティーリャ語文法』に関しては以下の研究書も参照のこと。ラファエル・ラペサ『スペイン語の歴史』（山田善郎監修・中岡省次・三好準之助訳）, 昭和堂, 2004, 296 頁 ; Rafael Lapesa, *Historia de la lengua española*, Madrid, Cátedra, 1997, p. 289.
  - 8) 引用者訳。Antonio de Nebrija, *Gramática de la lengua castellana*, cit., p. 101.
  - 9) 木下登『吹き抜ける風』行路社, 1995, 67 及び 70 頁。
  - 10) サラマンカ大学の歴史と学術的發展に関しては以下の文献を参照のこと。  
Vicente Beltrán de Heredia, *Los orígenes de la Universidad de Salamanca*, cit., pp. 37-79;  
Julián Álvarez Villar, *La Universidad de Salamanca. Arte y tradiciones*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 1993, pp. 13-29; Hastings Rashdall, *The Universities in the Middle Ages, tomo II, Volume II*, Oxford University press, pp. 74-90.
  - 11) 作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』（会田由訳）, 岩波書店, 1998, 6 頁 ; Anónimo, *La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades*, Edición de Alberto Blecua, Madrid, Edición Castalia, 1989, p. 96.
  - 12) 同上書, 11 頁 ; Ibidem, p. 96.
  - 13) カミロ・ホセ・セラ『ラサリーリョ・デ・トルメスの新しい遍歴』（有本紀明訳）, 講談社, 1992, 7 頁 ; Camilo José Cela, *Obra completa, tomo I*, Barcelona, Ediciones Destino, 1962, p. 366.
  - 14) 引用者訳。Juan Ruiz de Alarcón, *La cueva de Salamanca. La prueba de las promesas*, Edición de Celsa Carmen García Valdés, Madrid, Cátedra, 2013, p. 158.
  - 15) セルバンテス「びいどろ学士」（鈴木正士訳）, 『セルバンテス全集 第四巻 模範小説集』水声社, 2017, 275 頁 ; Miguel de Cervantes, *Novelas ejemplares*, Edición de Jorge García López, Barcelona, Biblioteca Clásica de la Real Academia Española, Círculo de lectores, 2013, p. 265. セルバンテス作品に見受けられるサラマンカ及びサラマンカ大学をめぐる記述に関しては以下の文献を参照のこと。Fernando E. Gómez Martín, *Salamanca y el estudio salmantino en la obra de Cervantes*, Salamanca, Andrés



- García Libros, 2017, pp. 23–111.
- 16) 同上書, 275–276 頁; *Ibíd.*, pp. 266–267.
- 17) 同上書, 176 頁; *Ibíd.*, p. 267.
- 18) 同上書, 284 頁; *Ibíd.*, p. 275.
- 19) 同上書, 311 頁; *Ibíd.*, p. 300.
- 20) ミゲル・デ・セルバンテス「にせの叔母さん—1575 年にサラマンカで起きた真実の物語」(樋口正義訳)『セルバンテス全集 第四巻 模範小説集』白水社, 2017, 657 頁; Miguel de Cervantes, *Novelas ejemplares*, cit., p. 625.
- 21) 同上書, 669–670 頁; *Ibíd.*, p. 638.
- 22) ミゲル・デ・セルバンテス『ドン・キホーテ後編 (二)』(牛島信明訳), 岩波書店, 2001, 168 頁; Miguel de Cervantes, *Don Quijote de la Mancha*, Edición de Francisco Rico, Madrid, Real Academia Española, 2004, p. 811.
- 23) ミゲル・デ・セルバンテス「サラマンカの洞窟」(田尻陽一訳)『セルバンテス全集 第五巻 戯曲集』白水社, 2018, 933 頁; Miguel de Cervantes, *Entremeses*, Edición de Nicholas Spadaccini, Madrid, Cátedra, (19<sup>a</sup>. ed), 2009, p. 242.
- 24) カミロ・ホセ・セラ『アンダルシア紀行』(日々野和幸・野々山真輝帆監訳), 彩流社, 1999, 138 頁; Camilo José Cela, *Obra completa, tomo VI*, Barcelona, Ediciones Destino, 1968, p. 128.
- 25) 同上書, 297–298 頁; *Ibíd.*, p. 269.
- 26) ダン・ブラウン『オリジン (上)』(越前敏弥訳), 角川書店, 2018, 276 頁。ただし, 原典の英語版が出版されたのは 2017 年であることをここに明記しておく。
- 27) 清水憲男『ドン・キホーテの世紀』, 前掲書, 232 頁。
- 28) 引用者訳。Alonso de Ercilla, *La Araucana*, Edición de Isaías Lerner, Madrid, Cátedra, 1993, p. 747.
- 29) ミゲル・デ・セルバンテス「サラマンカの洞窟」, 前掲書, 939 頁; Miguel de Cervantes, *Entremeses*, cit., p. 249.
- 30) 同上書, 943 頁; *Ibíd.*, p. 253.
- 31) 同上書, 943–944 頁; *Ibíd.*, p. 254.
- 32) 同上書, 945 頁; *Ibíd.*, p. 255.
- 33) ホセ・デ・エスプロンセダ『サラマンカの学生』(佐竹謙一訳), 岩波書店, 2012, 9 頁; José de Espronceda, *El estudiante de Salamanca*, Edición de Miguel García-

Bermejo Giner, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 2001, p. 20.

34) 同上書, 145-146 頁; Ibídem, p. 84.

35) 引用者訳。Gerardo Diego, *Poesía completa II*, Valencia, Editorial Pre-textos, 2017, p. 1367.

36) 引用者訳。Miguel de Unamuno, *Obras completas, IV*, Madrid, Biblioteca Castro, 1999, p. 31.

37) 引用者訳。Ibídem, p. 33.

## 参考文献

ALARCÓN, Juan Ruiz de. *La cueva de Salamanca. La prueba de las promesas*, Edición de Celsa Carmen García Valdés, Madrid, Cátedra, 2013.

ÁLVAREZ VILLAR, Julián. *La Universidad de Salamanca. Arte y tradiciones*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 1993.

ANÓNIMO. *La vida de Lázaro de Tormes y de sus fortunas y adversidades*, Edición de Alberto Blecua, Madrid, Edición Castalia, 1989.

BELTRÁN DE HEREDIA, Vicente. *Los orígenes de la Universidad de Salamanca*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, (3ª. ed), 1999.

CELA, Camilo José, *Obra completa, tomo I*, Barcelona, Ediciones Destino, 1962.

CELA, Camilo José. *Obra completa, tomo VI*, Barcelona, Ediciones Destino, 1968.

CERVANTES SAAVEDRA, Miguel de. *Don Quijote de la Mancha*, Edición de Francisco Rico, Madrid, Real Academia Española, Santillana Ediciones, 2004.

CERVANTES SAAVEDRA, Miguel de. *Entremeses*, Edición de Nicholas Spadaccini, Madrid, Cátedra, (19ª. ed), 2009.

CERVANTES SAAVEDRA, Miguel de. *Novelas ejemplares*, Edición de Jorge García López, Barcelona, Biblioteca Clásica de la Real Academia Española, Círculo de lectores, 2013.

DIEGO, Gerardo. *Poesía completa II*, Valencia, Editorial Pre-textos, 2017.

ERCILLA, Alonso de. *La Araucana*, Edición de Isaías Lerner, Madrid, Cátedra, 1993.

ESPRONCEDA, José de. *El estudiante de Salamanca*, Edición de Miguel García-Bermejo Giner, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 2001.

GARCÍA DE CORTÁZAR, Fernando. *Viaje al corazón de España*, Madrid, Arzalia Ediciones, (3ª. ed), 2018.

- GARCÍA LORCA, Federico. *Obras completas, IV, Primeros escritos*, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 1997.
- GÓMEZ MARTÍN, Fernando E.. *Salamanca y el estudio salmantino en la obra de Cervantes*, Salamanca, Andrés García Libros, 2017.
- LAPESA, Rafael. *Historia de la lengua española*, Madrid, Cátedra, 1997.
- NEBRIJA, Antonio de. *Gramática de la lengua castellana*, Edición de Antonio Quilis, Madrid, Editora Nacional, 1981.
- PEÑA FERNÁNDEZ, Teodoro. *Guía de la Universidad de Salamanca*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, (3ª. ed), 1999.
- RASHDALL, Hastings. *The Universities in the Middle Ages, tomo II, Volume II*, Oxford University press, 1964.
- RODRÍGUEZ G. DE CEBALLOS, Alonso. *Guía artística de Salamanca*, León, Ediciones Lancia, 2014.
- UNAMUNO, Miguel de. *Obras completas, IV*, Madrid, Biblioteca Castro, 1999.
- ブラウン, ダン『オリジン (上)』(越前敏弥訳), 角川書店, 2018。
- セラ, カミロ・ホセ『ラサリーリョ・デ・トルメスの新しい遍歴』(有本紀明訳), 講談社, 1992。
- セラ, カミロ・ホセ『アンダルシア紀行』(日々野和幸・野々山真輝帆監訳), 彩流社, 1999。
- セルバンテス・サアベドラ, ミゲル・デ『ドン・キホーテ後編 (二)』(牛島信明訳), 岩波書店, 2001。
- セルバンテス・サアベドラ, ミゲル・デ「にせの叔母さん—1575年にサラマンカで起きた真実の物語」(樋口正義訳)『セルバンテス全集 第四巻 模範小説集』白水社, 2017, 657-683 頁。
- セルバンテス・サアベドラ, ミゲル・デ「びいどろ学士」(鈴木正士訳)『セルバンテス全集 第四巻 模範小説集』水声社, 2017, 275-312 頁。
- エスプロンセダ, ホセ・デ『サラマンカの学生』(佐竹謙一訳), 岩波書店, 2012。
- 木下登『吹き抜ける風』行路社, 1995。
- ラペサ, ラファエル『スペイン語の歴史』(山田善郎監修・中岡省次・三好準之助訳), 昭和堂, 2004。
- 清水憲男「ネブリハ論序説—スペイン・ルネサンスの視座—」『思想』, 岩波書店,

小阪知弘

1982年12月，68-91頁。

清水憲男『ドン・キホーテの世紀（復刻版）』岩波書店，2010。

田尻陽一『原色の旅 熱い新鮮 スペイン』昭文社，1998。

田中純『都市の詩学』東京大学出版会，2007。